

## 京都市清水寺周辺地域における観光行動の実態調査 -歴史的観光地域の防災課題の抽出に向けた調査研究-

A Survey on Behaviour of Tourists at Area around Kiyomizu-Temple, Kyoto.: Toward Extraction of Subject on Disaster Mitigation at Historical Tourism Site

崔青林<sup>1</sup>・朴ジョンヨン<sup>2</sup>・谷口仁士<sup>3</sup>・鐘ヶ江秀彦<sup>4</sup>・伊津野和行<sup>5</sup>・関谷諒<sup>6</sup>・安井裕直<sup>7</sup>  
Qinglin Cui, Jungyoung Park, Hitoshi Taniguchi, Hidehiko Kanegae, Kazuyuki Izuno,  
Ryo Sekiya and Hirotada Yasui

<sup>1</sup>立命館大学研究員 グローバル・イノベーション研究機構 (〒603-8341 京都市北区小松原北町58)  
Postdoctoral Fellow, Ritsumeikan Global Innovation Research Organization, Ritsumeikan University

<sup>2</sup>立命館大学大学院博士後期課程 理工学研究科 (〒525-8577 滋賀県草津市野路東1-1-1)  
Graduate School of Science and Engineering, Ritsumeikan University

<sup>3</sup>立命館大学教授 グローバル・イノベーション研究機構 (〒603-8341 京都市北区小松原北町58)  
Professor, Ritsumeikan Global Innovation Research Organization, Ritsumeikan University

<sup>4</sup>立命館大学教授 政策科学部 (〒603-8341 京都市北区小松原北町56-1)  
Professor, College of Policy Science, Ritsumeikan University

<sup>5</sup>立命館大学教授 理工学部 都市システム工学科 (〒525-8577 滋賀県草津市野路東1-1-1)  
Professor, Dept. of Civil Engineering, Ritsumeikan University

<sup>6</sup>立命館大学大学院博士前期課程 政策科学研究科政策科学専攻 (〒603-8341 京都市北区小松原北町56-1)  
Graduate School of Policy Science, Ritsumeikan University

<sup>7</sup>日本ミクニヤ株式会社 (〒213-0001 神奈川県川崎市高津区溝口 3-25-10)  
Mikuniya Corporation

For Japanese national benefit, "Kanko-Rikkoku" (Tourism-based Country Promotion) is a significant keyword. In recent years, large-scale natural disasters occurred in a number of sightseeing sites and damaged a lot of tourists all over the world. This study tries to promote sustainability of community planning to mitigate disaster through increase of tourist attractions by activities to protect tourists. To protect tourists efficiently, it is required to analyse tourists behaviour. Therefore, a survey was conducted to grasp tourists behaviour at areas around Kiyomizu-Temple as a case. This study summarizes survey conducted at case area. From the results of it, subjects significant to disaster mitigation are extracted.

**Keywords** :Tourists, Sightseeing Behavior, Disaster Mitigation, Community Planning, Historical City

### 1. はじめに

世界の観光客数は2010年の10億人から2020年には16億人と伸び、確実に「右上がり」になると予測されている<sup>1)</sup>。まちづくりを取り巻く環境や今後の日本の国益を考えた際に、技術立国と並んで、観光立国<sup>2)</sup>も重要なキーワードになる。そのため歴史的な建造物、有形・無形文化遺産が多数現存する歴史的観光都市の役割は益々重要になるだろう。しかし近年では、大規模な自然災害が世界各地で発生し、多くの文化遺産や周辺地域の人々が深刻な被害を受けている。そのため、都市や地域としてのサステナビリティを考えた場合、観光資源としての文化遺産をいかに守っていくことができるかという視点も極めて重要である。自然災害から、人類共通の資源である文化遺産を守ると同時に、最大限の努力で尊い人命を守ることも我々の使命である。しかしその中でも、歴史的観光地域における、観光客を守る取組みは依然として貧弱なものだと言わざるを得ない。

世間は観光客を地理不案内などの理由で災害弱者として認識しながらも、災害を想定した観光客の実態調査は思うほど進んでいないことが現状である。観光客にとって、最も恐れている事態は観光の最中に災害に巻き込まれることではないだろうか。観光客が安心して観光できる防災まちづくりを推進するために、災害時の初期対応に深く影響することは何なのかについて明確にする必要がある。我々のグループは歴史的観光地域での観光客を研究対象とし、観光客の視点に立った、災害を想定した際の観光客の実態を把握することから取り込むことにした。特に観光客サイドでの初期対応を考える場合には観光から被災への状態変化であ

るため、通常時の観光状態も災害時の観光客に影響を及ぼす可能性は十分にある。本研究は観光客の視点に立った歴史的観光地域の防災課題の抽出に向けた調査研究の一環として、歴史的観光地域における観光客の属性、観光形態、観光への評価などの観光実態を把握することが目的である。なお歴史的観光地域として有名な京都市清水寺周辺地域をケーススタディとして、観光行動に関するアンケート調査を行うことにした。

## 2. 歴史都市防災の脆弱性と観光客調査手法の提案

本章では、歴史的観光地域に特有の地域防災における社会構造的な脆弱性と歴史的観光地域における実態調査の手法について提案する。

### (1) 歴史的観光地域に特有の防災上の脆弱性

歴史的観光地域は防災上の社会構造的な脆弱性によって、防災まちづくりが思うようには進みにくい。歴史的観光地域では災害による影響が地域の直接被害よりも、文化的建造物の復旧をはじめとする観光地域全体の回復にかかる費用や観光経済への間接被害のほうがはるかに大きいとされている。しかしながら、事前対策による間接被害の減災効果の定量的予測手法は現在のところ確立していない。そのために、発生が不確実である自然災害への備え、すなわち防災への投資は敬遠されがちである。また、古い町並みを保つ取り組みと空間確保、構造強度の改善との間で存在する矛盾と高いコストは、現地の住民および来訪する観光客を守る取り組みを含めた防災まちづくりの検討や、実施もさらに困難なものにしている。時期や時間帯を考えると、防災まちづくりの主体である現地住民よりもはるかに多い観光客は、観光地域の防災まちづくりに直接参加できない点も注目すべきである。いずれにしても観光まちづくりと同様に、観光客を守るための地域防災への取り組みを通じて、地域全体の観光資源としての価値を高めていく社会的仕組みができなければ、継続可能な歴史都市防災にはつながらないと考えられる。そのために、我々は観光地域の観光資源としての価値を判断する側である観光客を研究対象とした。

### (2) 歴史都市防災のための観光客調査手法

観光調査は観光需要の分析、観光実態の把握などによく使われる。調査事例としては、日本観光協会が実施する日本財団助成事業「観光の実態と志向」<sup>3)</sup>と、京都市が実施する「京都市観光調査年報」<sup>4)</sup>がある。「観光の実態と志向」は日本の観光動向を40年以上のロングスパンで把握する調査である。第25回調査では全国4500人を対象に、昨年度、国内旅行をどれくらい、どのように行ったかという実態と今後どのような旅行を行きたいかという希望について調査を行った。なお、標本は全日本国民に対して、層化2段無作為抽出法を用いて、154地点で4500の標本抽出をした。「京都市観光調査年報」は、京都を訪れた観光客に対して、面接調査で属性などの回答を得てから観光行動（動機、旅行案内、市内訪問地、観光消費額、感想等）に関する調査票を配布し、後日郵送で返送してもらう方法を取っている。厳密に再現可能な無作為抽出ではないが、地域における観光調査の難しさを考慮するとほかによい方法がないことが現状である。

しかし、観光の最中に災害に巻き込まれる観光客を取り巻く環境状態を把握するには、さらにミクロな調査を行う必要がある。観光調査は、対象が大量かつ流動的であり、正確に把握することは不可能に近いとされている。そこで通常時の観光行動から被災時の初期対応への状態変化を予想した上で、状態変化の流れに沿った設問事項を検討しなければならない。そのために、我々は観光行動、災害対応、地域内回遊状況を同一の回答者に順に回答してもらう3連設問票を考案した。実態調査は京都市清水寺周辺エリアを対象とし、調査当日に調査票を配布し、後日郵送で返送してもらう形式をとった。なお、我々はサンプリングの状態を判断するために、京都観光における清水寺への訪問率の高さ（図1）を考慮し、京都市観光調査年報の属性結果と照らし合わせることで、サンプリングの検証を行うこととした。

## 3. アンケート調査の概要

本章では、京都市清水寺周辺で実施したアンケート調査の概要（調査票の構成、調査エリア・調査時期の選定、対象エリアの概況）とアンケートの回答者属性について説明する。

### (1) アンケート調査票の構成

アンケートは三部から構成される。調査票 pg. 1 は、おもに年齢、職業、住所、観光目的など観光客属性・観光行動および印象評価を問う内容である。pg. 2 は、観光している最中に大規模地震災害が発生した想定で、初期対応などの防災意識と意思決定プロセスを問う内容である。pg. 3 は、清水寺および隣接する歴史的観光名所を含めた、当日の観光順序および訪れた施設の種類を問う質問欄と、自由記入欄（来訪施設の記入シートと観光経路記入地図に訪問施設および観光経路を記入するもの）である。

### (2) 調査エリアと調査時期の選定

今回は京都市内訪問地（図 1）として長年観光客に選ばれている清水寺の周辺地域を対象に、観光客に対する実態調査を行うとした。アンケート調査は過去の観光客数統計（図 2）を参考にし、観光客数が最も多い時期である 11 月の休日に調査を行うとした。

### (3) 京都市東山区観光地域の概況

清水寺は京都市東山区の歴史的観光地域に位置する。平成 17 年度の国勢調査<sup>5)</sup>の時点では京都市東山区の住民は、39868 人（男性：16827 人、女性：23041 人）、20488 世帯から構成されている。昼間であれば、現地の住民よりも観光客の方が多くなる。旅行シーズンとなるとさらに観光客が集中するエリアである。

東山区の歴史的観光地域（図 3）は東西を東山連峰と東大路通に挟まれ、北は概ね四条通、南は五条通（東海道）を区域としている。観光地域の東部は森林地域、西部の東大路通と鴨川の間は商業地域と隣接する。東山区基本計画まちづくり計画図<sup>6)</sup>と照らし合わせると、ほぼ全域が車を気にせず、歩いて楽しめる「歩行者安心エリア」となっている。清水寺から円山公園までの地域の一部は三寧坂伝統的建造物群保存地区として国の認定を受けている。

### (4) 集計結果にみる回答者の属性

調査票の配布は平成 22 年 11 月 13 日（土曜日）の 9 時から 14 時まで、清水寺周辺の各主要な参拝道で行った。今回は調査票を無作為に配り、郵送で回収する方式を取った。回答は一日の観光を済ませてから、自宅やホテルに戻った後 pg. 1~3 の順番で回答するように回答者をお願いした。調査では 1000 部の調査票を観光客に配布し、98 票（回収率：9.8%）を回収した。なお調査票 pg. 1 の有効回答は 98 票だった。

表 1 に調査回答者の属性を示す。女性が 7 割近くをしめ、50 代が最も多い。会社員（30.6%）をはじめ、通勤または通学している方が全体の 74.5%である。回答者の住所を見ると京都市東山区が 0%、京都府内合

### 京都市内観光訪問地(上位5箇所)

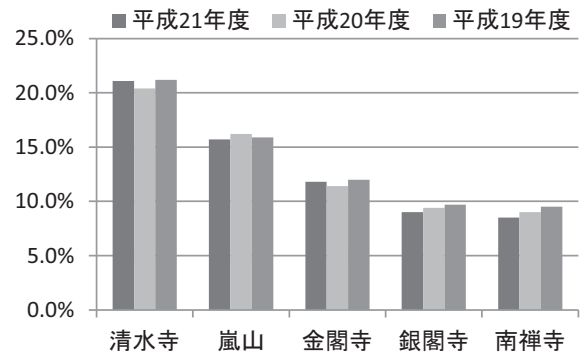


図 1 京都市内観光訪問地<sup>4)</sup>

### 京都月別観光客数

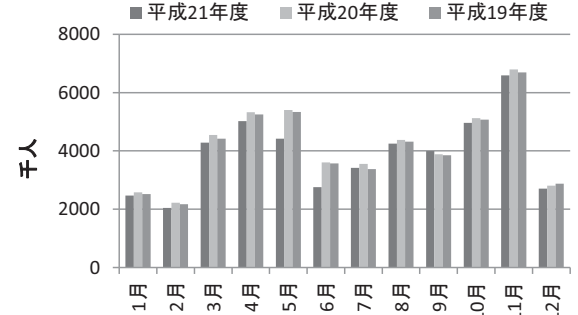


図 2 京都の月別観光客数<sup>4)</sup>

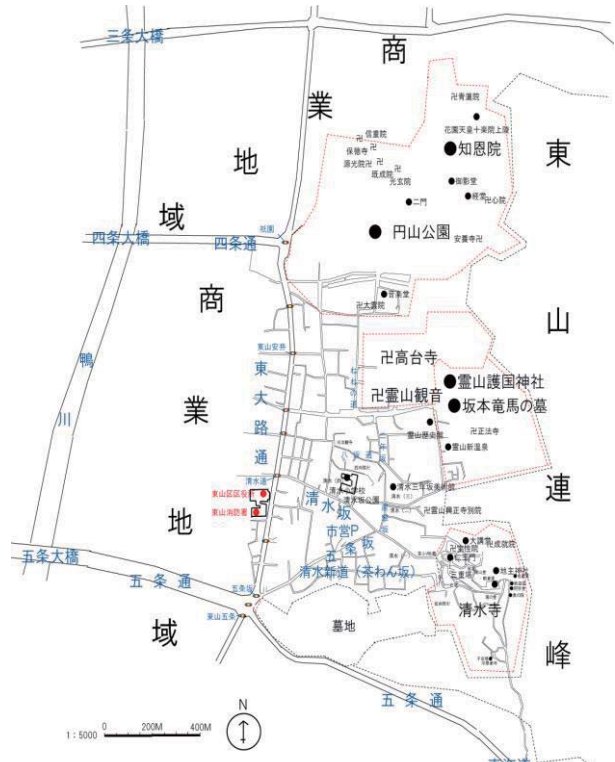


図 3 調査エリア（ゼンリン地図に加筆）



計では 12.3%で、京都府以外では 87.7%である。清水寺周辺への観光頻度は数年に 1 回の方が 42.0%で最も多く、次に多いのは年に 1 回以上訪れる方で 26.5%である。10 年以上訪れていない方と初めて来られる方で全体の 3 割を占める。回答者のグループ構成人数では 2~5 人の構成グループが 71.6%、11~50 人のグループが 11.2%、1 人で来る観光客が 6.1%、50 人を超えるグループが 4.0%である。清水寺周辺地域での滞在時間は 1 時間以上 2 時間までは 36.7%で最も多い。続いて 2 時間以上 3 時間までで 21.4%である。2 時間以上の滞在は全体の 5 割近く、3 時間以上の滞在でも 3 割程度であり、長時間に渡る観光回遊も目立つ。

#### 4. 回答者のサンプリング検証

##### (1) サンプリングの検証方法

平成 21 年度の京都市観光調査年報<sup>4)</sup>では、京都市内の主要な鉄道駅、観光駐車場等、全 15 ヶ所において、ア) 住所、利用交通機関、目的、日数、性別、年齢などを面接調査をしている。サンプリング総数は 11991 (前年総数：11998) である。イ) 動機、旅行案内、市内訪問地、観光消費額、感想等を郵送で回答してもらっている。回答数：1255 (前年度回答数：1215) よって回収率は  $1255/11991=10.5\%$  である。1 ヶ所における平均のサンプリング数は約 800 である。清水寺周辺も調査箇所となっている。今回は京都市観光調査年報の結果がより現実的な観光客属性を示すものとし、アンケートの結果を年報 (H 21 年) と比較することによって、サンプリングの検証を行った。今回のアンケートでは京都市観光調査年報の 1 ヶ所あたりの調査平均サンプリング数 (800) を上回る 1000 部の調査票を配り、京都市観光調査年報と同程度の回収率 (9.8%) を得た。

アンケートは清水寺付近での観光行動に焦点を当てるため、利用交通機関、目的では京都市観光調査年報との意味合いが異なる。また、アンケートは当日の清水寺周辺エリアでの行動を対象としているため、日数の質問がない。今回では年齢 (図 4)、性別 (図 5)、住所 (図 6) についての集計結果の比較でサンプリングの検証を行う。なお、京都市観光調査年報は現時点での最新年度 (H 21 年度) のものを利用した。

また、アンケートの属性分けが京都市観光調査年報と異なる場合、比較のために、集計したアンケートの結果を京都市観光調査年報の属性分けと同じまたは近い形に処理をした。詳細は各比較項目にて説明する。

表 1 回答者の属性

回答者個人属性		サンプル数	割合 (%)
全体		98	100.0
性別 (N=98)	男性	30	31.0
	女性	68	69.0
年齢 (N=98)	22歳以下	2	2.0
	23~29歳	6	6.1
	30代	18	18.4
	40代	18	18.4
	50代	29	29.7
	60代	17	17.3
	70代	7	7.1
	80代以上	1	1.0
職業 (N=98)	会社員	30	30.6
	自営業	7	7.1
	公務員	12	12.2
	専業主婦	14	14.3
	アルバイト・パートタイム	13	13.3
	学生	3	3.1
	無職	11	11.2
	その他	8	8.2
住所 (N=98)	京都市東山区	0	0.0
	京都市内	8	8.2
	京都府内	4	4.1
	京都府外	86	87.7
清水寺への頻度頻度 (N=98)	ほぼ毎日	0	0.0
	週1回以上	1	1.0
	月1回以上	1	1.0
	年1回以上	26	26.5
	数年に1回	41	42.0
	10年以上訪れていない	22	22.4
	初めて	7	7.1
	1人	6	6.1
グループ人数 (N=98)	2~5人	70	71.6
	6人~10人	7	7.1
	11~50人	11	11.2
	51~100人	2	2.0
	101人以上	2	2.0
	50人以上	2	2.0
清水寺周辺での滞在時間 (N=98)	1時間まで	14	14.3
	1時間以上2時間まで	36	36.7
	2時間以上3時間まで	21	21.4
	3時間以上4時間まで	14	14.3
	4時間以上5時間まで	4	4.1
5時間以上	9	9.2	

年齢別割合の比較

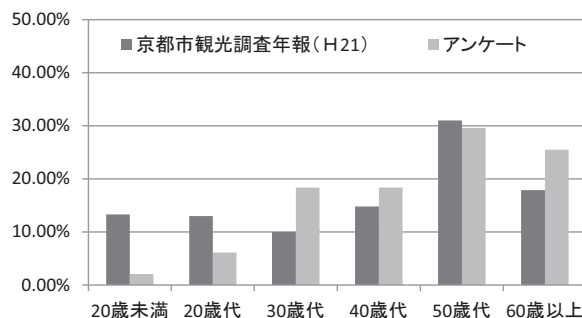


図 4 年齢別割合の比較

性別割合の比較

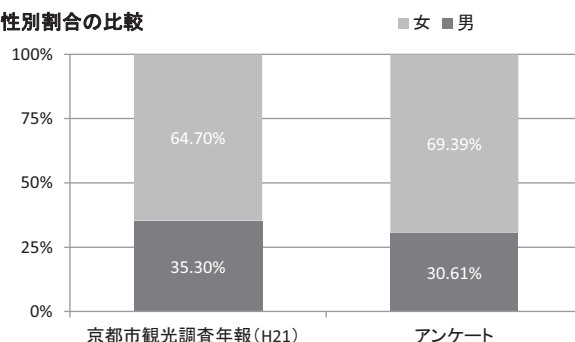


図 5 性別割合の比較

(2) サンプルング検証

a)観光客年齢別割合の比較

今回のアンケートと京都市観光調査年報では 30 歳までの年齢区分が異なる。アンケートでは学年への配慮で 14 歳以下、15～18 歳、19～22 歳と 23～29 歳に区分したため、19～22 歳は京都市観光調査年報（20 歳未満から以降 10 歳の単位で属性分けを行っていた）では、二つの区分に属するが、回答数が全体の 2%で、検証の結果に影響を及ぼすほどではないと考え、19～22 歳の回答者数を一律に 20 歳未満として処理した。その結果を図 4 に示す。

図 4 を見るとアンケートが京都市観光調査年報と比べて、20 歳未満、20 代の割合が低く、逆に 60 歳以上の方が高くなっていることが分かる。概ね、若年層の回答率が低く、逆に 30 代以上の回答率が高いと言える。特に 30 代と 60 代以上の方にその傾向がみられる。

b)性別割合の比較

調査と年報の性別割合（図 5）を見ると、京都市観光調査年報の女性割合 65%に対し、アンケートの方が 69%と少し高いことが分かる。

c)出発地別割合の比較

アンケートでは観光客の住所に従い、東山区、京都市内（区記入）、京都府内（市町村記入）、京都府外（都道府県記入・外国選択）の区分で記入してもらった。京都市観光調査年報と比較するためにアンケートの記入データに基づき、京都市観光調査年報の統計方式（北海道、東北、関東、中部、近畿、中国、四国、九州）に集計しなおした。結果を図 6 に示している。特に近畿地方の割合が低かったことが分かる。近辺（近畿）の方よりも遠方の観光客の方が回答割合が高い結果となった。

出発地別割合の比較

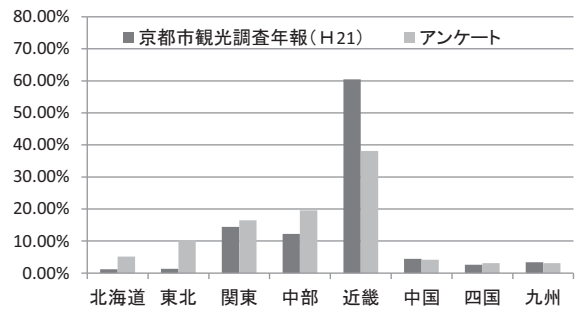


図 6 出発地別割合の比較

清水寺周辺地域での主な観光行動(N=98)

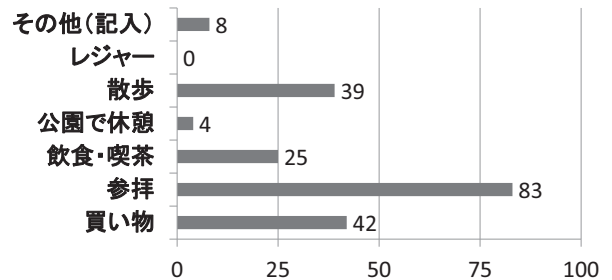


図 7 清水周辺地域での主な観光行動

5. 対象エリアにおける観光行動の実態

本章では歴史的観光地域における地域防災のために対象エリアにおける観光行動に関する調査結果について説明する。

(1) 清水寺周辺地区での観光目的

清水寺周辺地区に訪れた観光客の主な観光目的（図 7）は、参拝が一番高く 8 割以上の回答率であった。参拝を答えた方の中で、参拝のみの方は約 4 割近く、残りの 4 割の方は参拝のついでに、買い物、飲食・喫茶など他の行動も行った。また、参拝が主要目的ではない方も約 1 割強存在した。その他の記入欄では、慰霊供養の法要、写真撮影、舞子に变身、紅葉、観光ガイドとしての仕事などの記入があった。

表 2 対象エリアに着目した交通手段の組み合わせ (N=98)

前後対称(計:58)			前後非対称(計:40)					
組み合わせパターン		回答数	組み合わせパターン		回答数	組み合わせパターン		回答数
前	後		前	後		前	後	
3、	3、	18	6、	2、	3	2、4、	2、4、6、	1
7、	7、	12	1、2、	2、	2	1、6、	2、6、	1
2、	2、	9	1、2、	1、2、6、	2	1、4、	4、	1
1、	1、	5	1、	1、6、	2	2、6、	2、4、6、	1
1、6	1、6	4	2、	6、	2	2、8、	2、	1
1、2	1、2	2	2、	1、2、6、	2	1、4、8、	1、4、	1
4、	4、	2	3、	4、	1	1、	2、	1
8、	8、	3	1、2、3、	1、6、	1	8、	6、	1
6、	6、	1	4、	4、6、	1	1、4、	1、2、	1
2、6、	2、6、	1	1、2、6、	1、6、	1	2、6、	1、2、6、	1
1、2、6、	1、2、6、	1	1、	1、2、	1	2、6、	-	1
※交通手段の番号			1、4、6、	1、6、	1	2、	2、4、	1
1:電車	2:路線バス		1、	4、	1	1、6、	1、2、6	1
3:自家用車	4:タクシー		6、	1、	1	3、4、	4、	1
5:自転車	6:徒歩		2、	2、6、	1	1、2、	1、6、	1
7:観光バス			3、	6、	1	1、2、	6、	1
8:その他(記入)						2、	1、6、	1

(2) 対象エリアに着目した交通手段の組み合わせ (対象エリアに来る前・対象エリアを離れた後)

清水寺に来る前と清水寺周辺を離れた時に使用した交通手段（表2）は、電車、路線バス、自家用車の回

答率が高いことがわかる。また、ある観光地域における一日の観光活動に着目した場合、来るときと離れるときの交通手段の組み合わせが必ずしも対称的（来るときと離れるときが同じであることを指す）ではない。それは当日の予定や観光客の都合によるものである。来る前の用事、離れた後の用事などによって、観光客が自由に交通手段を選択することが可能なので、結果的に交通手段の非対称性につながったと推測できる。

### （３）観光のための情報収集

観光のための情報収集について質問した結果（図8）をその他記入分も含めて、情報の保有状態によって分類してまとめた。観光客自身が観光地の地理に熟知している方が全体の3.1%、観光客自身が何らかの形で情報の下調べや整理を行った方が合計で全体の53%、観光客自身ではなく観光団体や他のグループメンバーに任せた方が全体の13.2%、なにもしていない方が30.7%である。

### （４）観光消費（観光予算および可能な支払い方法）

観光予算について質問した結果（図9）、24.5%の方が事前に決めていた。観光予算を決めていた方の45.8%が1万円以内であった。実際の消費状況と予算額の比較（図10）では、40%の方が予算より安く済ませていた。ほぼ同額だった52%を合わせれば、予算以内に済ませた方が92%と高く、観光予算を事前に決めていた方ではその抑制機能が働くことが分かった。なお予算記入額の平均は25130円だった。また、図11に当日の観光消費での支払い方法（現金、デジタル貨幣）についての結果をまとめた。現金およびデジタル貨幣両方の方が65.0%、現金のみの方が30.6%で、現金を所持している方が全体の95.6%に上る。デジタル貨幣のみと両方とも持っていないケースが少ないながら存在した。

### （５）グループ行動（グループの構成・グループメンバーとの関係・グループの行動パターン）

アンケートでは観光客にグループの人数を記入してもらった。今回は交通手段の選択などに影響する構成人数を考慮して、1人、2～5人、6～10人、11～50人、51～100人、101人以上の6区分でデータ（図12）を集計した。結果を見てみると、2～5人のグループが最も多く全体の72%である。11～50人のグループが全体の11%で、6～10人のグループが7%、1人のグループが6%、そして51人以上のグループが4%となっている。

1人グループを除き、グループの構成メンバーとの関係（図13）について複数回答で聞くと親・子・兄弟（35.9%）、夫婦・恋人（34.8%）、友達（24.5%）、同僚（9.8%）となっている。また、その他の記入欄にはツアーの参加者、修学旅行、会社の社員、会社の役員、お客さまなどの記入があった。

グループ観光の行動パターン（図14）についての質問では、ずっとグループメンバーと一緒にいた方が全体の69.4%で、離れたがまた合流した方は22.4%である。離れて全く別行動をした方は3.0%程度である。

### （６）観光経路（事前設定および変更理由）

観光経路の事前設定について質問すると、事前に設定したと答える方は58.2%である。予定経路の変更状況とその理由を図16にまとめた。予定経路を事前に設定した方の中で、予定通りに観光したグループは76%、予定経路より長くなった方が14%、予定よりも短縮したと答える方が10%である。予定経路を変更した場合の変更理由については、時間の問題が63%でもっとも多く、そのほかの理由では道に迷った（11%）、混んでいた（3%）、他に見たいところがあった（2%）であった。

### （７）清水寺周辺の観光評価と観光まちづくりへの要望

清水寺周辺の観光評価では、観光の要件、新しい発見や驚き、安全・安心、総合的評価の項目について集計を行った。図17に示す通り、全項目において高い満足度を得られていることが分かる。観光まちづくりへの要望の自由記述欄では31人の記入があった。要望や意見のポイントを整理すると、7分類にまとめられる（図18）。なお要望には複数のポイントを言及したものがあつたため、ポイントの合計は31を超えた。

最も多いのが歩行者の危険性に関する要望で、坂もあって道も狭く、大型観光バスの進入などが原因となっているようである。その次には年配者・不自由な方・外国人への配慮に関する要望で、そのほか案内板やマップ、インフラ・設備の整備、歴史的町並み・美しさの温存などがあつた。

観光のための情報収集や整理(N=98)

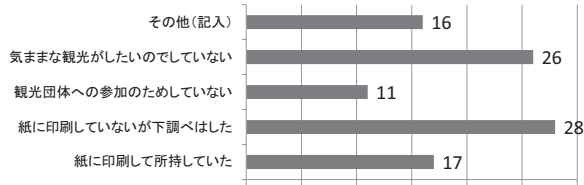


図8 観光のための情報収集

観光予算の事前設定(N=98) 観光予算の事前設定をしている方:設定金額(N=25)

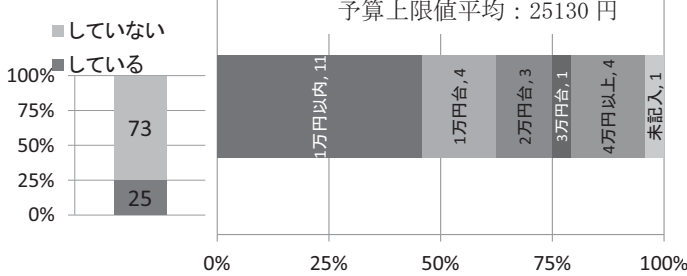


図9 予算の事前設定状態と設定金額

上限額を決めた方:消費額と予算額の比較(N=25)

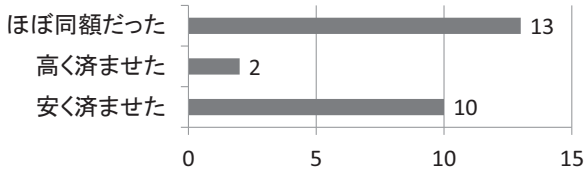


図10 消費額と予算額の比較

可能な支払い方法(現金とデジタル貨幣)(N=98)

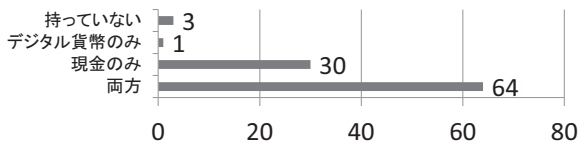


図11 可能な支払方法

観光グループの構成人数(N=98)

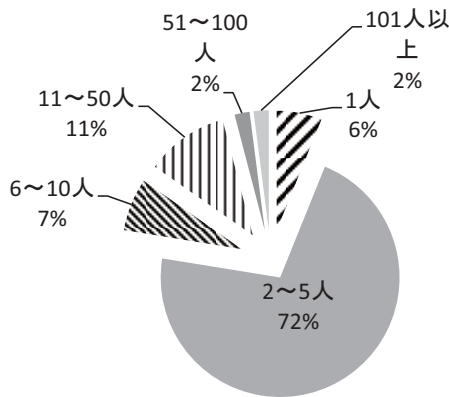


図12 観光グループの構成人数

観光グループの構成メンバーとの関係[複数可](N=98)

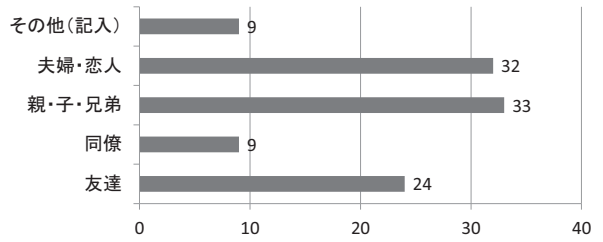


図13 観光グループメンバーとの関係

グループ観光の行動パターン(N=98)

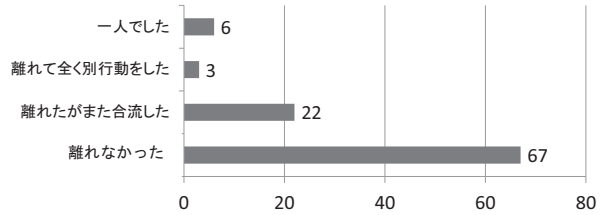


図14 グループ観光での行動パターン

観光経路の事前設定(N=98)

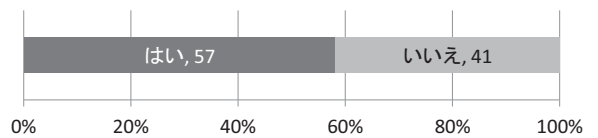
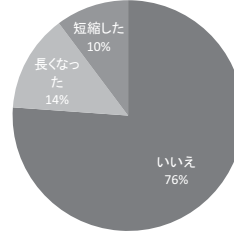


図15 観光経路の事前設定

予定経路の変更(N=57)



変更理由(N=57)

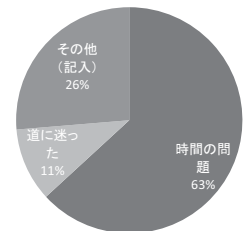


図16 予定経路の変更状況と理由

地域観光に対する評価(N=98)

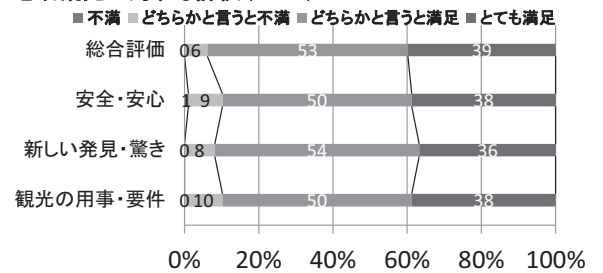


図17 地域観光に対する評価

観光まちづくりへの要望や意見の要点集計(N=35)

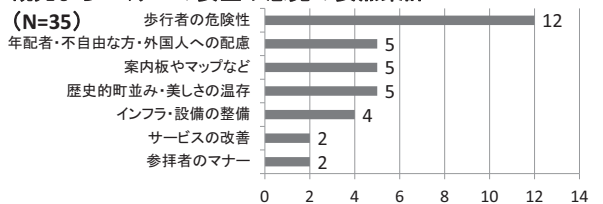


図18 観光まちづくりへの要望(要点集計)



## 6. まとめ

本研究では京都市清水寺周辺を対象とした観光行動の実態調査を行った。また、アンケート調査で得られた観光客属性（年齢、性別、住所）を、京都市観光調査年報と比較しサンプリング検証を行った。アンケート結果に基づき考察を行った結果、得られた主な知見を以下にまとめた。

1. サンプリング検証を行った結果、回答層の違いについて確認できた。京都市観光調査年報に対して、アンケートの具体的な回答者層の傾向として下記の3点が言える。a) 女性の割合が5%程度高いこと。b) 20歳未満と20歳代の回答率が10%程度低く、逆に30歳以上（50歳代を除く）の割合が高くなる。c) また他地域より近畿の方が回答率が低く、近畿より北のエリアは回答率が高い。
2. 清水寺周辺における観光客の8割以上の観光目的は参拝で、比較的長時間の神社・寺を巡る観光回遊を行うことが分かった。狭い参道、各神社・寺への集中は予想されるため、観光客の状況を考慮した防災取組み・管理マニュアルの整備が望ましいと考えられる。
3. 観光客の中で女性が7割近く、50代が最も多い。対象地域に訪れる頻度は数年に1回が最も多くて3割に上る。情報収集を行わない方が30.7%で、観光団体や他のメンバーに託す方13.2%を含めれば、4割以上の割合で、単独であれば現地の地理をまったく把握していないことが分かった。観光客への防災啓蒙・教育、現地の災害リスクや防災取組みに関する情報提供・情報表示の必要性が示唆される。
4. 特定の観光エリアに着目した場合、交通手段の組み合わせも多様で、必ずしも（くる）前と（帰）後は対称ではないことが分かった。災害発生時、当日の観光スケジュールや交通手段による観光客の対象エリアでの行動パターンへの影響についても考慮する必要がある。
5. 9割以上の方が現金を所持しているが、デジタル貨幣による支払いが可能な方が3割程度である。事前に設定した方の平均設定金額は25130円で、ほぼ同額または安く済ませた方が圧倒的であるが、観光予算が事前に設定しない方が全体の74%に上る。観光客は自分を満足させることがあるなら、潜在的な観光消費の拡大空間があると推測する。観光客が防災取組みを観光資源の価値として認識することで観光地防災を促進させることも不可能ではないと考えられる。
6. 観光ではグループ行動が94.0%で、メンバー同士の関係として多いのが親・子・兄弟（35.9%）、夫婦・恋人（34.8%）、友達（24.5%）である。グループ人数は2～5人が最も多い（71.6%）が50人超えも約4%である。観光では69.4%がグループメンバーとずっと一緒に観光を行った。よって、一時避難や避難生活は観光グループ同士への配慮、また被災時、グループメンバーとの関係による観光客の対象エリアでの行動パターンへの影響についても考慮する必要があると考えられる。
7. 観光まちづくりへの要望にもかかわらず、歩行者の危険性（12人）、外人、老人、身体不自由な方への配慮（5人）、案内板やマップの設置（5人）の指摘があった。このような歩行環境では、災害の場合にうまく歩行者の安全を確保できるとは考えにくい。現状を解消する方策が求められる。

今回は歴史的観光地域での事例研究を通じ、観光地防災を考える際に対象エリアにおける観光行動調査の必要性を示した。今後の課題としては、1) 防災利用を想定した観光調査項目の検討および体系化、2) 調査事例・サンプル数を増やした分析、3) サンプリング手法または検証手法の検討、などが挙げられる。

**謝辞：**本研究は科学研究補助金基盤研究(B)「災害弱者の視点に立った減災システムと防災ユニバーサルデザインの開発」[課題番号：22310114]の支援を受けた。また、アンケート調査は立命館大学歴史都市防災研究センター第二プロジェクト室および立命館大学理工学部耐震工学研究室の方々の協力を得て実施した。深く感謝の意を表したい。

### 参考文献

- 1) 山上 徹：観光の京都論、学文社、2002
- 2) 国土交通省編：観光白書、国立印刷局発行、平成18年版
- 3) 日本観光協会：観光の実態と志向、第25回国民の観光に関する動向調査、平成18年12月
- 4) 京都市産業観光局：平成21年の京都市観光調査の結果について、京都市観光調査年報、2010年7月20日
- 5) 総務省：平成17年度国勢調査
- 6) 京都市東山区役所：東山・まち・みらい計画2020 東山区基本計画 平成23年3月